

映画監督、脚本家、プロデューサー

## 太田隆文 / プロフィール

1961年和歌山県田辺市生れ。47歳。85年アメリカ留学。  
「スターウォーズ」シリーズのG・ルーカスや「バック・トゥ・ザ・フューチャー」のR・ゼメキス、「ダビンチ・コード」R・ハワードら、ハリウッドで活躍する多くの監督の出身校・南カルフォルニア大学・映画科に入学。ハリウッド式の映画作りを学ぶ。



帰国後、95年にハリウッド制作時代劇「GAI-JIN・開国」(米NBC)スタッフ参加。98年。連続テレビドラマ「風の娘たち」(テレビ東京)で監督デビュー。その後、モーニング娘。作品で活躍。「若い女の子をいきいきと描く」と高い評価を得る。

2003年、大林宣彦監督の映画「理由」のドキュメンタリーを担当。同時に大林組の映画作りを学ぶ。次回作のステップにしてほしいという、大林監督からの暖かい応援だった。

そして故郷・和歌山を舞台にした劇場映画「ストロベリーフィールズ」を完成。06年。和歌山県で先行公開。記録的なヒットとなる。その後、全国公開。

田辺市では大きな反響があり、互助会主催で講演会、東陽中学校の特別授業に呼ばれる。そして、07年度の和歌山県きくのくに芸術賞を受賞。記念講演も行った。

### 太田隆文監督作品「ストロベリーフィールズ」公開地

東京、大阪、名古屋、福井、和歌山、御坊、田辺。  
さっぽろ映画祭、アジア海洋映画祭、カンヌ映画祭フィルムマーケット  
日本各地でイベント上映。

### テレビ放送

東映チャンネル(2007)、チャンネルNECO(2008)、ザ・シネマHD(2008)、  
日本映画専門チャンネル(2009)

### 演出作品。BS日テレ・ドキュメンタリー「キズナの子カラ」 インターネットで配信中。

「#16 熱血書道教師と女子大生の新しい書道のカタチ」  
<http://www.subaru.jp/information/kizuna/index.html>  
(バックナンバーをクリック)

映画「ストロベリーフィールズ」製作日記ブログ

<http://blog.so-net.ne.jp/T-OTA/>

## 「映画」で町をアピールする方法！

不況のど真ん中。経済危機。「何とか新たな収入を得ることはできないか？」多くの自治体が考えるのが「観光」。生産や投資なしで、収入が見込めるからだ。

でも、京都や奈良ならいざ知らずが、観光資源が少ない町は厳しい。そんな時代に注目されているのが、映画による「町お越し」である。

その先駆け。大林宣彦監督が故郷で撮影した「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」、いわゆる尾道シリーズである。観光客が劇的に増えた。映画が町の宣伝になったのである。

通常、映画は観光地で撮影する。伝統あるお寺や由緒正しい建物を使う。しかし、それら作品では、「名もなき場所」や「何でもない路地」が映画の舞台となった。

なのに、そこに観光客が殺到。新たな観光スポットとなってしまったのだ。つまり、奈良や京都のような歴史的な建造物がない町でも、映画によって、新たな観光スポットを作り出すことができるということ。

それに習い近年、多くの自治体が映画口ケを誘致。撮影協力をする事で、我が町で映画を撮ってもらおう！とがんばっている。長野県も実践。多くの映画が撮影された。その効果で観光客が30万人増。大成功を納めた。

なぜ、映画が町の宣伝になるのか？ テレビの方がより多くの人にアピールできるのではないか？ そんな声をよく聞く。しかし、テレビは西洋医学。即効性があるが、長期間の効果がない。そして副作用が強い。

「大河ドラマ」の舞台となっても、宣伝効果があるのは1年。放送終了と共に、観光客は途絶えてしまう。テレビを見てやってきた多くの客を受け入れるために施設や駐車場を作っても、1年後は閑古鳥が鳴く始末。

それに対して映画はテレビほどの即効性はない。だが、効果が長期間継続する。映画館で上映が終了したあとも、テレビ、衛星放送、ケーブル、ネットと、さまざまなメディアで流れる。そのたびに雑誌等で作品紹介。10年以上に渡って、どこかで作品が見られるのである。

テレビが西洋医学なら、映画は漢方薬。長く利き、副作用が少ない。その宣伝効果を計算すると2億円以上になる。地方映画作りの活発化は、太田監督自身が以前から考えていたことと重なった。

**「故郷・田辺市は海も山もある美しい町。でも、東京では誰も知らない。こんな素敵な町があること。多くの人に伝えたい！」**

そんな思いを伝えたくて、5年かけて製作費を集めて、多くの方々の協力を得て、映画「ストロベリーフィールズ」を製作・監督した。

映画は地元でも東京でもヒット。長年の思いを果たした。が、実は町をアピールすると同時に、太田が考えていた、もうひとつのテーマがあった。それも見事に伝わったのだ。多くの人がこう言ってくれた。

**「我が町は何もない、詰まん町やと思てたんです。けど、映画見たら素敵な町や！誰にでも誇れる、素晴らしい古里であることが分かりました！」**

そう。どんな素敵な町で長年住んでいると、全てが当たり前になってしまう。美しい景色でも「大したことない」と思ってしまう。都会と比べ、何もない詰まらない町だと感じてくる。でも、本当は違う。それを映画『ストロベリーフィールズ』を通じて、町の方々に伝えられたのだ。

映画は単に「町お越し」をするだけではなく、「故郷の再発見」効果もある。町をアピールすること。観光に力を入れることも大切。

でも、まず、我が町の良さをもう1度見つめ直して、その素晴らしさを子供たちに伝えること。「誇りが持てる素敵な町」であることを再確認することが大切ではないか？ そのこと映画『ストロベリーフィールズ』を通じて伝えられたのである。

映画「ストロベリーフィールズ」(2006年)監督&脚本 太田隆文  
出演/佐津川愛美、谷村美月、芳賀優里亜、東亜優、波岡一喜、三船  
美佳。

田辺市が舞台の青春ファンタジー映画。東京、大阪を始め各地で上映。  
海外の映画祭にも招待された。主演の四人は映画のあとブレイク。今  
では全員が主役級の人気俳優。